がん患者さんに聞いてみたいこと

・がん患者を取り巻く環境で、あって良かった制度や仕組みなど。

限度額認定証

・不満な点、改善の余地のある点。

傷病手当→職場で手続きしてくれたが、1年半しか使えないことを知らず、結果的に使ったのは1か月。使いやすいように改善してほしい

・私の母も現在がんの治療をしているが、症状の重さについては私と話してはいない。

症状の重さや余命などのシリアスな話は家族にするべきだと考えるか。

　家庭環境だったり、考え方によると思いますが、私の場合は告知されたときの環境が一人親世帯で子どもたちがまだ未成年ということもあり、自分がいなくなった時のことを考えると現状を伝えておくべきと考えました。

また、自分でも体調のことなどは子どもたちに話してはいますが、一緒に外来へ行ける時は連れて行くようにしていました。そうすると、主治医は簡単に私の状況を話してくれたり、何気ない会話をしてくれているので家族も医師とのコミュニケーションをとれると思います。

・がんと告げられたとき、どのようなイメージを持ったか。

（例：もう治せない、治療の副作用が怖い　など）

ステージⅣ=末期=治らない→死が近い

・様々な治療法がある中で、どのように1つの治療法を選んだのか。

治療法としては化学療法しかなかったが、医師にいくつか薬を提案してもらい、就労しながら治療を続けるためにはどの薬がいいのか（副作用が少なめだったり、日帰り治療できるもの）医師と相談しながら決めた。

・がんと知ったとき、どのような気持ちになったか。

喫煙者だったので「やっぱり」と思ったのが最初に思ったこと。

と同時に子どもたちのことをどうしようと頭が真っ白になった。

・長期間の闘病において医師や看護師とのかかわり（コミュニケーション等の点において）の中で、どのような感想を持たれたか。

長く治療を続けていくには、私の中ではコミュニケーションが一番大切。自分らしく過ごせるよう生き方を理解し、病気そのものだけではなく、患者を診てくれるそんな医療従事者とかかわることができて幸せだなと思う。

・ご体験を踏まえ、がん患者として医師・看護師等に求めることは何か。

自分と一緒に伴走してくれること、求めるだけではなく、患者自身も患者力を高めなくてはならないと思う。

・がん患者さんの周囲の方（医療従事者だけではなく、一般の方）や、社会に対し、求めることは何か。

今は見た目は元気そうでも、腰痛で長時間立っていたり、歩くことが困難なので、公共の乗り物に乗った時に席を譲ってもらいたい。（ヘルプマーク使用）

働きながら治療している人はとても多い。がんになっても安心して働くことができるような環境を企業に求めたい。

・治療中に困難だったこと、辛かったこと。

\*ルートをとりにくかったこと（下血したときに、1週間の絶食+点滴で閉塞になり、何度も針を刺されることが辛かった）→ポートを入れて解消されました。

\*腫瘍内出血（頭部）をした時に車の運転ができなくなったこと（買い物へ行くときリュックを背負って歩いて買い物へ行かなくてはならなかった）

\*子どもの学校で噂になったこと（勝手に余命を言われたり、何よりも子どもに自分の様子を聞かれたこと）

・先生の態度・対応に関するお話がたくさん含まれていて、医師にはそのような部分も大切なのだと改めて感じられた。そこで、医学部の入試の面接で聞かれる質問だが「性格が良く技術が少し劣る医師」と「性格は悪いけれど技術はすごい医師」ならどちらを選ぶか？

難しい質問ですが、長く治療を続けていくならやはり前者の「性格が良く技術が少し劣る医師」を選ぶと思います。どんなに技術が優れていても、性格が悪かったらコミュニケーションがうまくとれる自信がないからです。

・がんの治療中に医師からしてもらったこと、かけられた言葉で助けになったことはなにか。

一緒に闘病している仲間の抗がん剤治療が奏功している中、自分はほとんど変わらずだった時に、「決して悪くなったわけではない。現状維持でよしとしよう」と言ってくれたこと。

・苦しい闘病生活を支えたものはなにか。

子どもたちの存在（成長を見届けていきたいと思う気持ち）や、罹患してから出会った仲間（一人じゃないと思わせてくれた）、そして病気だけではなく患者を診てくれる医療従事者に出会えたこと。